

第12号

# かいはつ

(題字 塚丘小5年)



岡崎市「子どもと親の集い」運動会より

岡崎市特殊教育推進協議会 昭和60年3月5日発行



## 市体育館での

## ハーモニー

特殊教育部長

林 勝 巳

「がんばれ、がんばれ。」「白勝て、赤勝て。」  
 広い体育館にこだまする声。フロアの上で演  
 技する子どもの目は明るく伸びやかだ。お母  
 さん方の競技には、一きわ声援が高く響きわ  
 たる。

A君もK君もJ君も一生命に走る。普段  
 の学校生活では見られない生き生きとした動  
 きである。

友だちの応援、父兄の声援、教師の励まし、  
 ひとりひとりの子どもの真剣な姿に刺激され  
 て動きは次第に活発になっていく。全市の特  
 殊学級の子どもと親と先生とが体育館という  
 場の中で、見事なハーモニーを奏でる。昨年  
 度の屋外での運動会とは、一味違った親和と  
 協力と連携とを増幅した雰囲気を感じ上げて  
 いった。

子どもたちの可能性をそこに垣間見ること  
 ができた。裸で子どもに取り組んでいる担任  
 の姿もあった。ささやかではあろうが子ども  
 たちの成就感の喜びや成長のあとがうかがえ  
 た。

岡崎市小中特殊学級連合

# どろい



準備体操

## 集いを通して

百十人、それに担任の教職員六十六人が参加。参加者全員の体操で始まり、四つのブロックに分かれて親子そろっての玉入れやタイヤころがしなど十種目を競った。

日頃、閉鎖的になりがちな特殊学級の子どもたちが互いに交流して社会性を養うのが目的で、岡崎市現職教育特殊教育部が「子どもと親の集い」を三年前から毎年実施している。本年度は、岡崎市体育館で屋内の運動会というかたちで行われた。

当日は、市内の十中学校、二十一小学校の計三十一校の特殊学級の子どもたち二百三十四人と母親

## 『子どもと親の運動会』に参加して

岡崎市教育委員 矢田香子

『子どもと親の運動会』に  
お招き下さってありがとうございます。  
とても心暖まる運動会でした。

先生方 × × ×  
準備 大変だったでしょう。  
実施要項 拝見して  
子どもの身体の動き × × ×  
心の動きをよく知って × × ×

良い運動会を、と × × ×  
祈りに似た 愛の実施要項 × × ×  
私は、教育の手引にしたいと、胸がじんと あつくなりました。

大切にとっておく事にしました。  
入場行進 素敵でした。  
はなやかな プロスポーツの入場行進  
にぎにぎしいオリンピックの  
入場行進  
どれもあまり感動しないのに  
『子どもと親の運動会』の  
入場行進で  
子ども一人一人の目を見ていたら  
子どもの真剣な顔を見ていたら  
胸がじんと あつくなりました。

## 子どもの声

福岡中 一年 作品から

ぼくは、岡崎市体育館へ行くのは初めてだ。どういう所か見当もつかない。初めてきた時わあ広いなあと思っただ。二二で運動会をやるのだ。まず最初に入場行進をする。ぼくは旗をもつ役だ。思わず失敗したらどうしようかなんてかんがえてしまった。わりとうまくいった。入場行進の次は体操で、その次が玉入れだ。たしかぼくは四つぐらい玉を入れた。そして緑チームが優勝した。やったねと思った。次に小学生のかけっこ、その次にぼくたちのタイヤころがし。でもまた緑チームが一位だ。あいかわらず好調だ。そしてこんどは小学生高学年のかけっこで、その次が父兄たちの野こいしこいで、それが終わった。らまちにまっ、たお井当。



タイヤころがし

やっぱりかい、はい運動したあとのぼんは最高だ。次におきかえりレーで、その次がぼくたちの自転車レースだ。このレースは自転車じゃなくてなんと三輪車だというのが。ぼくがやっ、たら小さくすきてハンドルのかじがうまうまかなくてどんどん曲がって、いってしまっ。た。そのおかげでおそくなってしまった。その次がぼくたちの徒競走だ。ぼくは四人のうち二位だった。ぼくは足がぶおせいので二位なんてとてもできなかつた。その次が全員でやるジャンカだ。最初相手がみつからなかつたのでとまごった。とても楽しかった。もう一回やりたいな。

# 親子の集い

# うん

プロگرام

昭和五九年九月一七日(月)  
午前三時～午後三時五分

閉 会 式	開 会 式	演 技
10、ジュエ ンカ	1、たいそ う	全 員
9、徒競走	2、たまい れ	小 中 親
8、自転車 レース	3、かけっ こ	小 (低)
7、おきか えりレー	4、タイヤ ころがし	中 親
6、野こえ 山こえ	5、かけっ こ	小 (高)
昼 食	6、野こえ 山こえ	親
小	7、おきか えりレー	小
小 中	8、自転車 レース	小 中
全 員	9、徒競走	中
	10、ジュエ ンカ	全 員

男川小 六年

ぼくは、みんなとバス  
のって岡崎市の体育に  
行きました。にゅうじょ  
うをしてはじめのしきを  
やりました。たいそうを  
しました。おわりました  
。たまいれをやりまし  
た。三回つづけて二位に  
なりました。かけっこで  
ひろじくんが一位でひ  
ろじくんが一位でひと  
みちゃんも二位でまさ  
くんが三位でした。タイ  
ヤころがしでまさくん

親にとつて 子どもは  
自分より大切な宝物  
子どもの走る姿 投げる姿を  
見つめる 親の眼を  
応援席で 息をのんで見る  
親の心を感じ  
私は 胸がジーンと  
あつくなりました。  
× × ×  
競技会で  
勝つてとびる選手と応援者  
敗けてうなだれる選手と応援  
者を私はよく見る。  
ときには 敗者が勝者を

敵とみることもあるかも  
『子どもと親の運動会』には  
かなしみがない。  
みんな 精一杯やった喜びで  
敵をにくむ暗さは  
微塵もない。  
こんな素敵なスポーツの世界  
がここにあった。  
これが 真のスポーツの  
心ではないかと思つた。  
× × ×  
『子どもと親の運動会』に  
お揃き下さつてありがとう。  
沢山の感動を下さつて  
ありがとう。

かあさんとひろじくんの  
おかあさんとのぐくんの  
のおかあさんとひとみちや  
んのおかあさんがでまし  
た。こんどのかけっこは  
ぼくとむらせくんののが  
くんとくみちやんとみえ  
こちやんでました。ぼ  
くが一位でみえこちやん  
二位でむらせくんが四位  
でくみちやんが三位での  
ぐくんが三位でした。野  
こえ山こえがおわつてか  
らべんとうを食べました  
。とつてま肉がおいしか  
つたです。トイレに行き  
ました。

## 作品展

矢東小……三輪車はうまくこげたかな  
連尺小……玉入れいくつ入ったかな  
男川小……かけっこはだれが一番かな(絵日記より)  
大門小……うまく入ったかな(はり絵)



連尺小 6年



矢東小 6年



大門小 3年



男川小 6年

矢北中 二年

きのつ、ぼくは、バスにのっていきました。六名、函崎体育館についでおりこはいりました。

はじめに、ぼくらがこうしんをやりました。ならんで一れつになつたこたいそつをしました。はなしをきいてうしろにいっこ、すわりました。2かゝりめがはじまりました。小学校のかけこです。ぼくたちは先生がまっごつこにのつたのどきました。ぼくは、ばんごうふたをわたす人になりました。

たまためはみどりの中学校が、かちました。

みるのこはんにまっご上にいっこ、べんとうをたべました。また下のぼしよにいっこつづきをやりました。9ばんめは中学校の徒競走で、ぼくのばんがきたときぼくは、むこうのちりもがつつよいそつごした。びとりやすんごいでたのでうらやりました。ぼくたちの抱きは、はた



をあげるびごした。ぼくは守野もーばんがたつた。ぼくもーばんになつた。やるときめるとはまのほうをむいてはいるようにをした。はしつた。スヤードをだしてーばんがたつたのでうらやした。ぼくは2ばんがたつたのでばんごんでした。バスにのつて学校へかえりました。マルバムをもらつて部活にいっこ、うちにかえりました。つかれた。たのしがたつた。



梅園小 六年

ぼくは、かけこつたのせが、一番最後です。ぼくのせがみやつてきた。となりの子には勝つ自信があつた。そしてはたかたつた。ぼくは、きりきり走りました。ゴールが近くなり、少しのせがみでつたため、少し早く走りました。ゴールに入つて、ぼくは、たつた。残念であつた。

自転車きょうそう



ジェンカ

# 親の声

親の声は、運動会当日・閉会式の父兄代表のことばというかたちで紹介いたします。

本日は、第二回「子どもと親のつどい」運動会をこの様に盛大に催していただきまして誠にありがとうございます。私達のように、特殊学級の児童を持つ父兄にとりましては、この様なびのびとした楽しい会は大変有意義なものでございます。と、申しますのは、日頃、普通学級の児童に対して何かと一歩おくれをとっていることで気持ちが暗くなつたり、消極的になつたりすることがあります。それがもとで子ども達も淋しい思いをしたり、ジレンマに落ち込むことがあります。ところが、どうでしょう。今日の子どもの明るい姿は今まで見たこともない程でした。私達父兄にとりましては親睦の場となり、日頃の悩みを忘れさせてくれる楽しいひとときでした。その上、おみやげまでいただきまして、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。きっと子ども達も忘れることができないと思います。これから今日のような明るい気持ちを持ちつづけ、お互いに手をとりあつて心を広げ、子ども達のために頑張っていきたいと思ひます。本日はどうもありがとうございました。



- A 「今年の運動会も何とかすんだけど、どう思った。」
- B 「ほだね、だいたい良かったじやん、体育館の中で風もなかったし。」
- C 「うん、ほいでも昼食の時くらい外でたべたかったなあ。」
- D 「だけど、体育館でやったことは、子どもたちをまとめるのには良かったわよ。」
- E 「体育館でやるなら、もつとおそくても良かったかもね。」
- F 「今年は、入場行進や学級旗もあって気分が良かったよ。」
- G 「学級紹介がよかったよ。」
- H 「ほんだけど、行進は何だか固苦しかったなあ。開会式ももっと簡単でいいよ。」
- I 「全体の流れは、去年よりスムーズだったんじゃない。」
- J 「召集や器具の人ががんばったからね。」
- K 「出場種目が多いで、子どもたちは忙しかったね。」
- L 「ちよっと出すぎみたいない気もしたわ。」
- M 「ほいでもうちの組の子は、あれ位がちょうどよかったよ。」
- N 「中学生なんか、もつと全力出してやる種目があつてもよかったかもね。」
- O 「お母さんたちだけの種目は、なくてもよかったんじゃない。」
- P 「人数が多いもんで、何人かのグループでやるのがあつてもよかったね。」
- Q 「三輪車のやつはおもしろかったね。」
- R 「徒競走は、かなり走れてよかったよ。」
- S 「何ちつてもジエンカがいい。みんな疲れてもニコニコしたつたよ。」
- T 「あれをプログラムのはじめにやつたら、もつとみんななじめるかもしれないね。」
- U 「ほだね、同じチームでもよその人と話はできんもんね。」
- V 「応援も時間がなくてでかんかったけど、応援合戦なんかやるのもりあがるな。」
- W 「チームの人数が多すぎるけどしょうがないね。チームの数は、そう増やせんし。」
- X 「中学校のブロック別に分けるのも、人数の関係で完全にはむずかしいみたいね。」
- A 「なにしろ、せつかくチームになるだで、みんなでもりあがつた応援したいね。」
- B 「もりあげるなら、量の時間に何かアトラクションがあるといいね。」
- C 「得点表かなんか作つて、総合優勝めざすと熱が入るかもしれんけどね。」
- D 「ドベのチームがさびしいよ。」
- E 「今年も賞品がよかったね。子どもが大よろこびだったわ。」
- F 「だけど、ちよつとりつぱすぎんかった。その分、賞状を全員にくれるといいけどな。」
- G 「小さいのでいいからね。」
- H 「ところで、このごろ若い先生がふえてヤングパワーの時代になってきたね。」
- I 「みんなでもりあげて、連帯感を強めていくのが大事だね。」
- J 「それにはやつぱり運動会が最適だね。来年もみんながんばるまいね。」



たつた一人の障害児の教育といえども、決して小さな点の存在ではなく、教師の力量と魂を極限まで象徴した大きな教育であることを認識し、「教師」の構築を迫られながらの実践の中で、胸の奥に輝き続けたものにとりだすと……。

○真面目だけで「創造」が無ければ不真面目。

梅園小 後藤 君平

○教材や子供、学級を「あたためられる」教師に

○気力を「継続」させる。

○真面目だけで「創造」が無ければ不真面目。

・障害児へのほげしい世話は当然。教育のいきづまりも当然そんな中から問題の見える教師に。

・教育は感傷、同情、福祉からの出発ではない。人類成

・算数を教えながら算数が嫌いになる。あいさつを指導してもあいさつができない。教科

・自ら学んだ充実感が気力をさそう。

・「育つ」は日々の積み重ね、不可能から可能がひきだせるか。

長の証しを示さなければ。軽卒、単純でなく、近代社会の発達レベルにこたえ、多様多彩、複雑な障害児教育の構築を鮮明にしなければ。

感覚や成績主義をのりこえ、心を育てる教育、感情に迫る教育、生きることの教育を。

・わかつてくれないからと手を変え品を変えでは子供が混乱

・不安や冷たさの無い授業を、治すのではなく、いたわりと自主獲得をたすけるために。

南中 山田 哲也



# 『のん気・根気・やる気』

根石小 片山 美恵子

「先生お元気ですか。わたしこんど結婚することになりました。安心してください。……。」

知能は高い方だったが、行動性格の面でいろいろな問題を抱えていたK子が、久しぶりにくれた便りです。そのたどたどしい文面を何度も読み返し胸に迫る思いをかみしめたのは、一年程前のことでした。最近、赤ちゃんができたうれしそうに電話で報告がありました。無事に産み育てて欲しいと願うばかりです。

K子は、私が新任で連尺小学校の特殊学級担任となった年に、ちょうど一年生でした。そして、K子達の卒業を見送って、私も他校へ転任したという因縁のある子どもです。そのK子がもう……と思うと、時の移り行く早さを感じざるを得ません。

私は、昭和四十年から六年間連尺小学校で特殊学級を担当させていただきました。当時の校長先生は深津時二郎先生で、特殊教育の部長さんをやっておられました。

また、一年目はまだ若葉学園ができて前だったので、市内特殊学級の先駆者である磯員一夫先生が隣の学級にいらっしやって、市内各所からやや重度の子ども達が親と



当時の授業風景から

いっしょに通学してきていました。その頃は、学級定員が十五名で私の学級もちょうど十五名でした。学年も一年から六年までで、障害の程度や種類もさまざま。と

にかく個性溢れる子ども達ばかりです。そのため、十五名全員が教室に集合するのは給食の時間のみといったすさまじい有様でした。しかし、そんな中にも、原学級復帰をめざして促進的な学習を必要とする者達もいたので、学級経営の悩みと同時に、学習上の悩みも深刻なものがありません。静かな普通学級を横目で見ながら、すぐに行方不明になってしまいう子ども達をよく探し回ったものです。

そんな時、磯員先生から、「特殊学級は焦ってはいけない、のん気・根気・やる気だよ。」と教えていただきました。当時附属小におられた畑中先生からもそうしたご指導を受けました。私の心配をよそに学校中を走り回っている子ども達も、種々な障害を背負いながら一生懸命生きています、その中には未知の可能性が十分秘められており、それを焦らず小さな進歩も見逃さずに引き出してやるのが私達担任の仕事なのだ、わずかながらもわかったような気がしました。

なつかしい時代、今でもつい焦りがちになる時、この「のん気・根気・やる気」を思い出し、自分を戒める糧としています。

## さあ、情緒障害児教育研究サークルへ

どうぞ

独特な世界に浸る子供達を前に、途方に暮れたことが、少なからずあったことでしょう。現代人の誰もが、情緒障害ならずも、不安定と言える今。案外、身近なところに、子供達と心をつなぐ「かぎ」があるのではないのでしょうか。

ところで、特殊に携わる人達がいろいろな角度から特殊教育を探究していくのに、是非、このサークルを利用していただきたいのです。

発足こそ遅れましたが、月一度は、気軽に顔を合わせる場にしませんか。もちろん、広く門戸を開放しております。職場のどなたでも、誘い合わせご参加ください。

当日、飛び入り大歓迎です。ひとりで悩み苦しむより、大勢で相談しあえば、悲しみは小さく喜びは大きくなります。そして、疲れは軽く、収穫は重くなることでしょう。

子供のこと、授業のこと……あなたの言葉で、話してみませんか。さあ、どうぞ。サークル連絡先 粟中 小椋

## 朝の名物

羽根小  
ななくみ



八人の子ども達が洗面器を手に持って行列する。その後ろにはタオルをかかえた先生が……。今や羽根小の朝の名物……。ついでの間も、理科室へ移動中の六年生とばったり。

「あ、朝プロ」と声がかかった。朝の会、日直さんの、「はみがきのれんしゅうをします。したくをしてください。」の声とともに銘々が歯ブラシ、コップ、洗面器を準備する。水の冷たい時期となったが、朝プロの行列は休むことなく続けられる。家でも歯みがきしっかりね。

